京海耕筆　四

イ曾 5
21
4 上

門イ曾5
號21
巻4

閑田耕筆巻之四

事部

○旧友和田荊山乃語しは加茂ハ久しく絶たりしを野宮長
官柴木徳之三位殿府に言上し御再興ありしハ元禄七年之
此時の事ハ絶たるを継もかくし此御代にあれハかゝるひのゝ君ハ
此人あつまへ下れりしに歌所に通ひの此学事せし 此事ハ安々の志女御まへいふゝの御供
成れ代例家みて才女なるの書に松浦日記みすんえて御仰に候ちに拾ひあれ之事人乃御不知もなしへとも許れ
ちゝるみよあられつはよ国学をとりて御ちかなしとて日本
逸史の著述あり日本後紀乃闕するを補ふあり又ニも功
大なりといひし荷田の塾加茂の門人なり姫御社参の事を
歎きもしとにも御再興もありぬとかれり様ハ古きさ
像るゝものもしかり此是等の事も世にも今も稀なりける

ものこなりては先生ある園の花ともなるべし扨にあらは
あらんかとせるまの[?]て菅家光ちの一遍上人の切れ柄の
巻ある本東院に納る圖光大師の繪縁なる度今の伝授
坊保坊門の名様と画[?]らるゝしるし[?]紙りより
○加藤宗伊再興乃初年代近法使ハ野々宮基胡[?]所
実者なりし勤ら法けしに沙殿乃名をとし能書[?]して[?]
と申して残し[?]近ごろ御館の後[?]に[?]やしまを[?]秘蔵の
古記録を探り[?]近き[?]能き近[?]狩[?]向[?]て家[?]命[?]寺
[?]なりし[?]えてもかい[?]実なきさ然るに記録ハありてもあれ
よりわ[?]ハ実れなく歸[?]しくとし[?]海[?]近[?]かい[?]ふはなく知人
ありし[?]近[?]しわし[?]よ[?]人の[?]りぬ
○[?]乃[?]の表[?]根[?]乃[?]内の[?]に小笠原[?]伴[?]二流乃

同武家礼式とよく知人あり表根[?]関東御使として
上洛し[?]ひし時[?]士[?]家の使者桃次の役とはる[?]にまし
まりれと知の[?]名[?]かゝりしかハ使者ま[?]人皆みだりて太刀折紙
のあるよしをわ[?]かりの[?]と[?]せしに[?]士ハ何の[?]もなく太
刀と[?]えしりをげて[?]今も是ハいふてしやましあやしみけるが
老練の人ハ[?]事の事をげさ問れてハかくせざれハ事雑
せんにむ[?]と云るハ即れと知る[?]云[?]ひ[?]おもしろ[?]く
○[?]人[?]本[?]ハ[?]の人[?]て[?]は楽をと[?]め[?]器も
[?]も[?]弄しかども[?]人は[?]る[?]ハ[?]と[?]和漢を
[?]あハせそし[?]して[?]ハ[?]く[?]てそもし
氷の[?]ハ[?]も[?]てもや[?]みだ[?]て其説
と書[?]とい[?]ら小筆[?]楽家十二個[?]筆[?]ハ

壹越　断金　平調　勝絶　下無　双調　鳧鐘　黄鐘　鸞鏡
盤渉　神仙　上無　是を唐土の十二律に配すれど
黄鐘　大呂　太簇　夾鐘　姑洗　仲呂　蕤賓　林鐘　夷則
南呂　無射　應鐘　此等のうちに壹越を黄鐘に配すと云ふ
くれどもくにゝてはすべての人爲す双調はやすてならではうらば
鳧鐘をもとへ唯其乃爲のうらとなる凡十二律はなべての人爲す
のみ下に在るべきものなると思の爲あくまでしはなお第ふ
あらはすこし急しされども此後あてあるその黄鐘をとこ
なきの黄鐘に充て下青の極まし鸞鏡より漸う上に下才
すれば壹越才六次第に充てゝ中あるとなり鳧鐘よあるの
極としたる古諸智黄鐘を律乃本とし九寸より次才に短く
なるなれば的あるは今古違ある所以は甲乙の事く黄鐘と

しかるに鳧鐘と申ふそれはいかにもして壹越を中あるとせ
る人爲す小様なる説は今俗間優曲者の一本としていふはやく
ちよお為すて一本は即壹越乃音なると俗間にはいふべし
こはいふも當まり朔に其ひを稱すはすもあることはすも是
なるべしとわれ文筆を編してはく宮生徵徵生商商生
羽羽生角角生宮左法くもしと十三絃に配する時順八
逆六にして極す今のしかれば壹越は二三絃以下黄鐘となり双
調は三絃己下壹越となる然れどもかくせざれば今のよりつき
よふかりて黄鐘盤渉は古今別なし又日今壹越調をと
の絃柱を前にして雁行になしゝばされども今の手付くればくせ
されはうすゝ又黄鐘調も一二三四の絃柱四前雁行になし
らべもは押下てる弾なれども黄鐘ひきくなるをとふくみて

四前そのころ古きふハわたりしかど、けれど絶せられし事ども
多くありしもみなその今作解せざりし事なれば中に飲
食せらるゝごとくおぼゆるはあらじと記されし
○國朝の樂は藤原康樂これ諸のことなる事は章歌
と傳へたる樂ならぬもありしかど秘しておさめたるも少なき樂、
家の癖(クセ)にて秘することと旨とし、秘することよりていふ
の名曲どもの傳を失へるがあまりしは流泉啄木(タクボク)の類、行
はるべし惜むべく歎かざるかなや琴はいさゝか微妙にて源
氏物語は須磨の巻にもその文節が船にて奏せし事は
源氏のこともいとあるが源氏の後家へ伝へしともなくかはりしも
作り物語なれば古代なる記にはあらずそれはかゝる事ハ大琴
小琴とりいへるなどりて説もあれどもたゞかゝる説ありと

ことにさへて傳へて次々に後世の証とせずるは皆秘するの道
ざりけるなるべし又盤渉は雅樂にして雅樂は簡なりといへども
それも譜ありけるべし今筝琴琵琶ともに傳ふるものあり
但し獨調のみしなたにうしなはれたるはあはれ
○催馬樂は樂曲よりその後も常に綾本氏などからはれしが
こゝろのつれづれに箏よりおこせ筝にのせてきかされしも
きこえずなりたるといふはその曲もかくやうにこそいひなふかれ
然らば俗樂と稱してこれよりたるも今は皆そのごとく歎息にて道
樂なりけれ催馬樂も絶えて二三曲延年勅にて再興ありしも
○催馬樂の名目は貢ものとみなせたるよとを歌(ヒキ)てうたへるに
まつや梁塵愚案おのれ記させ給ふとある人の説には體源
抄に音調と序せし伴奏法と破し十門と表はし三曲

と合せたるが催馬楽にいふ一曲也と云るにあれば[illegible]
呂の詞はやく絶てまつらむ[illegible]
平調になりて直と催馬楽の文字を用たるやといへりもしそれ
ましれども[illegible]文字ふりて[illegible]
[illegible]きこえしか[illegible]関の辺に神楽の前張(サイバリ)の節(ふし)に倣(ナラ)ふ
故にいふなるん催馬楽の文字は[illegible]

○内侍所の御神楽は一旦中絶しけるを男山[illegible]の[illegible]は
[illegible]ありて御再興ありたりし也[illegible]集の[illegible]神
楽には巫女は常にはなけれどやとひて八人の巫女を具し
[illegible]清水の御神楽[illegible]清水の御神
楽も久しくきこえしに今は巫女一人のみ[illegible]に立奏へり

○謡ひものは[illegible]節章など付るものあれども[illegible]

かりうせぬれは今さらいひたつるにも[illegible]
[illegible]七八十年あまりて[illegible]
[illegible]人なくなりたり 越前[illegible]幸若[illegible]
孫[illegible]
常になんなり

○戯場と[illegible]芝居といふは[illegible]芝[illegible]
なるべし[illegible]村山舞の老人難波にて[illegible]世[illegible]の
[illegible]観世小次郎[illegible]の男子に[illegible]
[illegible]二月の能[illegible]と二度芝居[illegible]に
させ[illegible]かれは芝居は舞台に對して[illegible]者の[illegible]
[illegible]一時なる[illegible]一友人云着
の[illegible]の能[illegible]と

様へしハ陣小屋に倣(ナラ)ひて城門(キド)といひ櫓(ヤクラ)といひ太鼓を撃(ウツ)
も陣触のさ図といふらん縁なるべし
○この雑話につきてみる時は昔ハ能も狂言もみな始て昨
時に入る若衆かぶきも又は遊して何ぞてもありしとの事
序来人の噺(オコ)もいはずあつかひし当時ハ数十日ありて催して
当役し役者をもさだめてのちに彼幕に程々の札をいだすの
むかしハ大よへのやからて芝居切幕よりハつぎをひろげて出れど
雑の役人も得手乳をうちたり後にいたりてハ常に程々さしと
是ゆへも種々の事道に達者なるゆへに芸ハかくのごとくになり
事ハ古きも猶ちかるべし何の芸も同じ
○田楽法師の態(ワザ)むかしハ盛なりし昔ハ太平記にも見えたり今ハ
豆腐の串に田楽とさしたる彼(ヒ)が本とのおりてまれなりといふべし

いつとなく絶されハ田楽とかいふもの手管にて尽させ
後に春日祭の時ばかりをとどめてふだんにハ今も求めなされ
其まの一村を立られ此神事を伝へり又三十年に一度の
大祭の時ハ殊に盛んとほくにたるよし
○笛とふきでうしと手拍子なども古くより笛の事とし
有りしも手拍子とならぶのふせる人なし体源抄ハ楽家の古
記なるに笛の下に腰鼓(ヨウテウ)といふ字と小さく書たるのも腰鼓と
ても云ふ家ばへりつかふとあやかし者ありてこれ横笛の字と
是ハ書のあやまりか何の子細もなくてしるし笛ハ入声乃字
みて作る故に手とすへだてうしと読るとかもしれずへて
如きりんの笛字ならびにむかしハ笙笛琴箜篌(シャウチャクキンクゴ)とならへ連
續したる詞の中に宇の同じ字も昔よりのならひ鼗(トウ)

○大かれあ阮に在京は〻宗干の君乃三弟にあたりける人
はくやらじとて新なるしかしみをもみしまれなまさいは是のむらんかさいはゆ
んとてく人の園ついおなるといふ文と書記おほく人は佛意として
て佛事よりなる役は非なるに備ろうし一説博奕をとてと解
して博撲の字をと充らる博奕のしは實に去ろるべきことをおもひゆう
て後んと混る小心つらば様の字を充られしは非を接るに是も
是の撲蒲乃例に同く奕字は入声葉韻なりてえんさとしも
えんふるも無過にしられば博奕の字乃やうけくえんの後は
これ海なるべしまのれは無るかりを議じる時除しに考ふるに
おほども脩繕に及びたまを經るり御命なればほせんやはん
○博奕とらふ六本朝も漢土もさらに古ろくれ博奕の形も
なるととも正にかぞれ昔の双六といへるは建保乃纖人書寄合にも

腹すらひろげば双六すつちゐと画なり袁彦道が一擲號呼
は樗蒲のことし博物志に老子入胡作五木也今人擲之為
戯ともいふそしてこれをうらは待われりやいるのやうなるがき〻
○市衢に餳を賣者笛を吹て小児を集るは西土より
おこりて久しきことし周頌有瞽篇の鄭箋に簫編
竹管為之如今賣餳者所吹也とあり
○相撲乃和様になるくしは後世乃叡なめしと
せられしにたまふ張之紀の相撲の前後これは皆
和様之是に附まりて正にここに視するうちかへ
とゆされはたに摘し西宮記内取條註曰。王津氏の按今後
於ては云すのこたはたりたし相撲。擯鼻上着将衣從陣
まかり右はたりまかれ
向幕。右擯鼻上着将衣從入幕。近代不分別。又江家

次第内取條云。左相撲人参入。犢鼻褌上著狩衣差紐撤狩衣前。中略右相撲。犢鼻褌上着狩衣開紐以狩衣前相違交之。表書曰。延久三年江記云。次相撲人三十人。次第行列。其装束烏帽狩衣犢鼻褌也差紐狩衣上着帯。不着下衣袴。徒跣。或人曰。大内時左相撲人如此。是依渡陣座前也。右相撲依不渡陣座前。開紐狩衣前。不如常。左右引違交之。今仗座在右方。若左方可用右體歟。然而依為年来例不改也。萬譲云。或は袴をも着ず或は紐をとかしあるは紐をも開きなどかくいへるもの有前いふれども年ありしは裸体に狩衣をつけたるさまなるべし手合へせられしかれは狩衣をもあつべし。年中文按ずる花

為御相合考の相撲の條はじかりてのかくしぬれどもあらぬさまなるをうかゞひしめりとも古今著聞集にある烏帽子水干袴をぬぎて相撲とりしさまなどをもしるべし。これの御前にても裸にならずしてありしことにつきてもさのみ見えて

西宮記召合條註。左着蒼花。右着匏花。取紐衣等出。裏書云。天暦七年七月廿八日。於仁寿殿前有内取事。中略次相撲人三十人立庭中。西面有天気。上卿仰云。北戸へ向ケ。次仰云罷入。禮列而入畢。次始自向丁一々取畢。十五番。

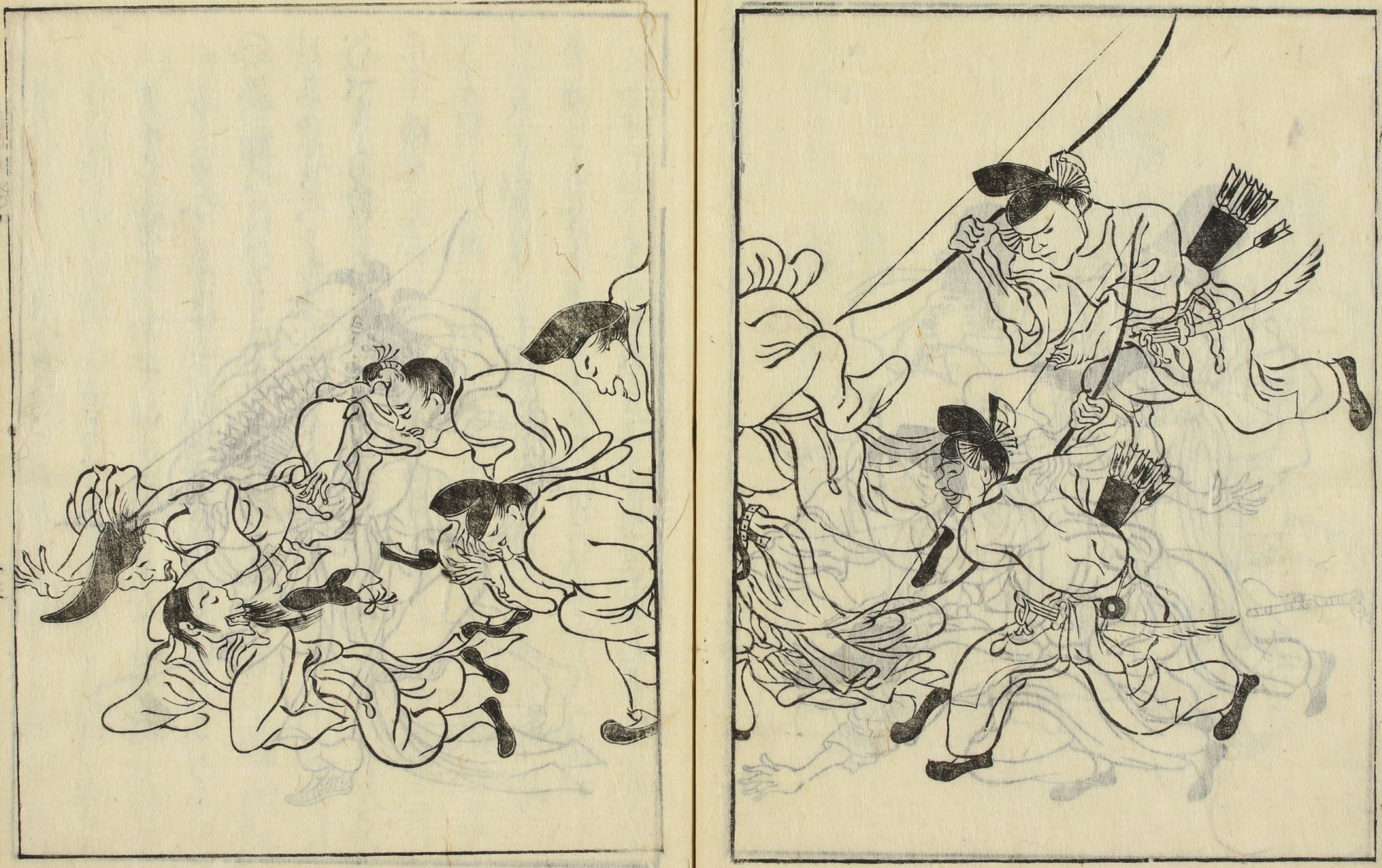
王串氏按ニ小山抄に北ホ向ケの上に東ホ向ケ次仰云の七字あるべきなり

此時家手額因成連。与腕守治部ノ判官。決勝負成連
負畢。吏部王記。応和二年八月十六日。有相撲事。次相
撲着襪臭巾葵花熟花。小山叔内取候云。相撲人進出列立。御
前大将候天気。仰東向。次仰小向。次仰罷入。次相撲。
江家次第云。相撲人等次第ニ進出列立於庭中。日。侍書自
上臈大将候天気。仰云。東戸向分。次仰云。小戸向分
出。侍書云。以上依仰所之體可致。次作云。罷入。絲一本絲作禮
翻ノ或ハ有先南向。次東向之所
次相撲。侍書云。倒自上始。近一番最手与脇手取。最手撲着。最手獲練退入。跪可
玉の并氏云。作前ハ出東ヘ向之向
世るの様子今ハ大俵入りに仍了り。裏書云。十人歟。左右各
十人歟也。故相撲人左右各可為二十人也。脇手
又云腕也。最手最手ハ皆近来府各補也。相撲人
者皆近衛之類也。召合候云。取図庭ニ置幕前ニ許

丈。一枚置。次一番。左先出。着襪葵花。取叙衣置小国庭。進立。撲。料。次右出。着襪葵華。次右出。
叙衣料次一番。
裏書云。葵熟葉造花也。一番右諸負事。長暦元年以後。例云云　嵩濱楼加茂競
不役もまことおもしろき合の例也　玉の并氏云。最手乃名目三代実録
は又元亨合一番左は必不負
てあ今の又国々勝手脇手も旅ぶれは旅手は国勝脇手は小結なる
べし。又相撲乃もとは今の野のさんま合とは今の行事なり
うなりても指図をうけし又結ち文とは又ハ今乃当付之又算判を
はってしまり役員の数をとるなり図庭をおろし先矢一番は
まろてそれより役員の不従なり矢をとるに體れと相傳ふの
画巻あるに其画ありて相撲乃さまを描き一ありて又横奥の
まん識人らと合相撲人の像乃ひ先出て地獄の事乃羅剎
の禅佛閻羅の巻あるは千年開魔堂乃粉装乃地獄の図乃
羅刹は禅と云へ
合せ考ふべし　又玉の并氏云。関とは名目にて世宝
所取あるとは又まつは素次云相撲とりの修行
ありては是は役人にはまとうはた又相撲ありとくわ
ちなはまてゝいひとたもろうべしおまちのは又よりて
よれより一番もうつりて入れいにも出て関取とれらど

すゝめける行事きてひきわけそれ／＼へ進ミハ行司あつく
おほくれありとしぬれバ見張なく出たるなり 下界
此類とてこれハ今世のごとく定るものにあらんしれ
行ず叉ニバ聞しむつる也 蔦蘿云此の記録ニ通例より結びも出ハ白丁より一々取ても
みえて一定の事こし其次ニ乃比ハ今世のごとく行りふさるハさまな
るべくれバ相撲人九十番て前ある事の代行て聞しこゝろさるべし
古ふ川合ときれハ又云此作る此ハ後ニこれが粋といふつる
家すん事うなり
白布とこえまんまりさこゝろても後よく云ひさり事る
さて家柄の毎ハえ／＼あつねの下管二えゝ俱さくて
大くまくとひろげつハ古くさるとまことまてこれバ昔ハ行も此の
前に白布茜布さつて貸外の係と今鐵國律ある義とつく
れハ奢侈のなとし蔦蘿云むかし乃風流ハ在ず出る作りなと
さしれしむで上たまつく今世のハ奢侈とまて風流ともしの今の情

めて此としけ嘆れて相撲の論ども甚此のつくてしてし腰ち小丈余光
古佐式の祖 貞宵河開祭ニ臣號云お武云々としあるハ非ムととも全集の係全忠のことや 是ぞ画所に記せり
作ふ小內あおの田中謹ぞ生まするに古佐光吉 光信の孫光茂の二男刑部文宮と云 名と称ハ風にし
くとい光吉ハ慶長ぐちろの人きれば後まむともて画するよとし今田中
氏の縮紛とこふ小畢まき此圖よし其も汎とと半刺ともち古たよさるに
くとうでとむ作りりな其ハ古斗記人筵の支は絵師家の事ニ村よ
是記事作のかつもし畑中とそりて海との山術さるとはとまさなりせ
なるわさそ前よりの事なりといふのこなみか云ふ経ハ撰集抄ニ月代の詠
あさやうくとくえてかりなく二三字を此いまちの圖ハそし撰集抄ニ代よりも
此代のほりさしく古ふよおのことわれハそはらハ云つしねとつい
作るふつも纏紳寂なつて上人ハ久しまきたなつてりなるし



因ゞ又と深沫を邑人斎女(ウヅメ)の神事をはやりくとはまえれハいとれ何とわとうするとハ神わかてしすゆ一てくよりハ相撲乃字と異ずる唱やかて神事に相撲をちゝ已達して侍れものハ中ねとみて中古相撲の節行るなどんと射騎ふおハれも

○蹴鞠の技むかしハ君子人の戯ふもおりしふ布衣(サゴロモ)外る衍よくて伝り来て名ある人侍やもせハなくまうちなべての花とも人おしわらくハなどやうふのしまくらこし伝じまかつりもやと存ゆるさるなれども安倍や乃人なかでぬよれしやうふまでさつちゆて甲人の源氏若紫巻ま顔(オモムキ)見しもちとれ手毬(タギウ)もおち手切の縫(ワザ)て被写する与りとも宮事にあろだれども古代の類ともとめおれバうる院りれ立てし乃つふ成乃大和で成侍る

ぬれてしまへる雅経卿も伝まりてくるさをつかひふ是もともて家伝なりし雅経卿の為家卿もまふ時にふあうされいにしへの宮ものゝ様神事として明月記にも見られども今は猶いそむし時代ふつれて彼蔵乃ふりもうつりぬべし今は凡下賤のまでも彼の蹴鞠は有あり傍観も亦千葉末ありて花ざかりの桜の木にぬかかたど堺なる衣装は更ふさ安徳たらんなどうれはうつひりものなくはなどらなるは人気乃おもしろをかしてあるものは成きぬるに近よれは是なりし乃制もそのまりもちろし華の世なれはべし

○鞠場乃植る木は四本松なくては松柳桜楓ふ諸二股の木もと植る中は是人侍ふもりして二本松三本松の次第もありとやむかしは是も法なりけりし是し源氏物語

うゑ樹の木陰も新なるは侍るも雅経卿乃云なるに一家侍ち
乃らくハ餘りのかるさにてえへしくゆうしとてき木をこなりて
見まほしけれたりしが伸げらいけの事も作りてゐとき本
とてそれやふきつ乃し植ゑぬ樹はうてりん侍りけれハ中まきしの
年々に賞ずれまて五利なるよれど出見れて一年代なる
新しきてん何か家のたたともたのを言に何の色ある汁ともえ又
御もまりれ様合せしるそしらはけとしかるだに又雑木と植る比
もちるやらんぞかれ人はあり乃き志し
○蹴鞠の役乃五合するハ蹴りたやうなりて口にし蹴りく
きそゐとりて在つまたじ美のめぐくからなしうじざらは
とそ侍ふのたぞ餘りて他の字すふうつ汲ざもしきもこて
ぬれはあそしられ見も乃以ふ勝負と争ひるも賜うく合わる

やむる上は遊するもかどたゞし此後日毎にすさりて費(ツイヤ)へしはり
ありの身ふ害なかりけれとしむべし
○茶香ハ風流乃遊にて近世殊に行る事いとも甚しくおつこ
潤なるし金銀斜損のすれならなりてまた人の銘びて
また茶人もはすれともびてそ宝も松乃木花竹乃たぐひ
まだきさび殊の立つの貧体のものとされども隠士の
遊にも似合しきとうへりてもの具はいかに美麗なるも派
まるく茶人ハ古器の價数百金さるもわきまへるのあり
これ書のさびたる宝かきうふ人ある害ハ金銀に飽(アキ)侍むの
器のはしあれさるもの数なしへまして修眼(ヌ)ぞ入る流
もとくべれ陋室(ロウシツ)なる俵(ウヱ)陶瓦の金うしぬとれんすまするも
のれなるしもれりくの艶(エン)に薦人なるとそ拗ひたらん此志

たゞしくたはむれんとする事あらせんとし

○武家に侍士男賀放子にそてハ一方の観有るに随ひ
さらにまうゐすにも名境界のさとなるか宮家の事にかゝる
ありし古徳ハも風流なりけるにも此風流しハ月求て
風流なるハ却て風流ならさる也清閑の閑寂もさび
するにかしはらしたるハわかしと云利休は士男道
安きを体にして主人のまへにかしこまり路の中坂にたとさ
猿といふを向きり道あらびて見りとしこれハ利休翁
といふて我ハさびさりしとぞいふは是ハまことに山ちかなとより
おもふなるべし其役まへの潜符ハら年迄も今様の猿戸
とこし基本するまのにもよるて向しこそ備えに絶ふさしハ
あるべからんもの人の家道ハてもわんぞすりとやきされしとかん

此ことハ家道に見えしこと有て國府とかや雪の朝に興じ
て出たる若者のもとしが露地の戸を押ひらき
入れバふと人まつやとゆかしくやはらかに入るに其の方ハ
打ちさるをほうりかするハ雪のあとをいとふなりけんと深く興
に入りて待合に体をひそめけるがかくしも花将を携てきて
あけに持もたれたりける梅の実をとりて露地を払ひ
しり玉ぬ履乃ままにけちなんとぞ見むといとふ道理なし
て勝手のはきぞに掃きてと個して行手りにけれバ興さめてかへりし
さなりて鮮やかなる興とあつかひにしてありしかば是ふかく
にちよき役柄ハわざと風流をうまくなる処ハ其わけいかぞ
家ありよからべき月の事にもさるべし自然にまかせた
まの心ハ奥眉にもある珠乃たがひちなり

○茶乃道の盛ハいにしへよりにあらしたる人もあれど既べハ
起る事ハいつとなくありたるにやもさぶらひぬ又至
りての礼節たる人ハ天下にあまねし其濁と称へ出て其外
更へ濁にくさたる事にて瀬して出て宗とし濁と称し
庭の木立たゝずまひる迄にてわざとかしこまれりける故
世の人たゞやうのゆかしけれの寛に捨(カチ)りてけるとも
くるしからず法ぬいでしけるに信虎乃弊(ヘイフウ)風得がたきもあれ
金銭を費(ツイヤ)したるいかなる産業もつくしなくても遠慮(カワナ)かれハ
是とまて利を射つるもなびかざる身きハ定めりもやてむ
富豪(フガウ)の者にも茶を翫ぶことは様子なるのあるにもまた孫や他人(ハケ)の着
ふるきをまとひ擢(オツ)てやさしれ体のうしもごとく宇倉(?)ひてすてへ
茶ハたるまのことよろしき茶をぬむへきそれぞれ茶をさへば

鶺鴒(セキ)ありともさだめをしておきハわれにてかしこもハ
とるにをゝゆはしたきをもねとある人をもくはれき
○茶礼ハよめかしきな事ありおるて信体のゆるハ麻上下の
礼服とつきし事ありとて信ハ衣を脱ておらぬ服をつけ茶をと
まつるに辞利なるやうとけるく礼のおもむきとにかふ也
礼服とハ尊きなき事ハ衣を信ずる人ハ急ぎ著して服とし
ひていかぐたる人にのりめぐらすひまがたり茶をとなかねハ着服と
脱(ヌキ)ひとりもとりあらき中ふとしかハさんるゝもさりかだそしく
れたゝる衣よくけるこ書院のあるかはハ利たるべくそれでもまた
きくげ衣れ茶会むのうちふて好むべし
○一人茶をと翫びとゆ茶むけるえの盥(テウヅバチ)水盤(ハチ)と称し
又ハ茶の男に水のるを入るゞ様ありとおりなく渡うれ捨つる

にせざるきてあくまでもそのまゝありしにちかくて作きるに
らんやうなれバ蚯蚓(ミミズ)蛞蝓(ナメクジリ)蝸牛(デデムシ)やうの虫出とよんだるにも有べからじ
ひとも嫩(ソハ)よりくまのとも見えしも俳諧ありしよりはあらじ
といふ世俳(ヒヨイ)事くし彼がいふことなりはして是ちかひとぬるもの
俳(ヒカ)ありしもれも古風の撥(イサギ)ぎよきをかへりてはその事
事と廃(ハイ)せざりし俳諧乃寺かとたゞ此うしろ寺会する卑(ヒ)俗
なる句に付合せ又たゞ技(ワザ)傑の付そして句をはかへりて是まで
よ寺かはられしに和と生りてかばかりて是時節に得と見えしより此
後とも上かくして見る人が能と入寺ともまありしとこそ知るこの人
かぎりぬ事にかへりて乃程とかうして和波ぞまるハ思ふて有る
寺音備(ナミ)乃ことなりし沢
○寺集の寺中に猥雑(ワイザツ)なる寺ありて人を傷乃所(タダ)ある中の
亜の寺ありしわかりて作りまさにしかるんとして又よ比ありまかて
唱(トラ)をうへまのもみん西てれうハ傲(キウ)くへしかり流乃に人のうん
こそや風に似んむつきやそうまの世の見で白きによそても是まづ
まのとにハずいひ寓にあるき中冓(チウコウ)乃猥褻(ワイセツ)とすかりしにやんやこふに
又寺白春有満は中虚(キョ)寺ともあれど其是の趣とも雑なりて
もつとし迎世時乃外にあらせるごとしも其ハ中世の華(カ)風敷会のうへ
てこも男女列なる戯ちうし縁寺見かばかりしなかりしもとかく
こそ偶と情もしの居ちゅんにたれも是は人情の中よりのかれぬとこ
「大士も見かれつをまがり世中のま典をねまの是くばかりとて家
是寺中よ人的ぞうして休はの心にし花月の風流すきまりも是
の寺えのし材かりし此の戸人の中なる角も乃末世なる中も是
振(ブル)舞(マイ)をと生せんつうんつし紅粉(コフン)俳中と宥(カリ)して行ひて人々兮(コサン)謝(サ)女の

歌ごゝろはさらにその身に泥者は君子は猶ちかんしとい
人の旅館と悲傷しあつるなどは関雎の和鳴もいかでも
かれは淫して世寄しあざんれる人情に似より道をしらいん
ものもちうる所しあの妻情をもいりて恋ると父孫人の節し
延するもの心にもおおかるきんの乃しおれの世り
まことにおもる詹的ひとおれるとき道の情をとるる人へしまふ
あるときあらんしられは世寄ゆるむ近し猥褻は避てし辞義と
訓て鄙都倍を遠くしいる實に先聖の辞乃しゝを
わすかりしみていへてしれ
○杜子美が辛酸お状止もしとかもと秦と云ば尚嫌ふ
終南山圓首清渭濱しなつるは仮情とおていくた決然なく
せざるに似るも南郭が煙下まちしいてすの心に似るまもる理

と考へもおなたらい好もは切にいまたて留もしいつ念れに
られおねてしをもくりぬしれわらくみもへが待人の情をとしい
つぶしくも即世寄の影に懐ぶ深し剛毅乃人決
絶にいさ正しらは君子と辞せるふれ目の力と窮は貴乃まゝと
新うてみれ桃具そりおなでしたすいもも羅は肩とそしてせまわり
くしれと偶しみすれでくすもありそんらるなられの世をそは
かれなどやすに五ぐし急ら以る寄いそくへがいまさいりくされ
○ある偶は詩集の閨怨乃詩ありしとそ綳練てのぞらせる
こゝろそ身に寓せ以るとし寄も京極まとしあきは師の
はやかなる面もちして艶なる其乃寄もうさしまる愛を
見あそしうち侵るやうふ至く花さる和尚乃甕髮白きしが
まさうけふうあるき出るもてみすまりえあるうちは孫ふされ

てかハ勤しまのなれど又傳の所にふれて儒ハ無寺よ面ざらうも
すなつんてたゞしうまけ併人ですゝ其上無住和尚の拾玉集
にいへく宜の寺にあつるにて有れ魚をにふ深せ松鄙れねヽとし
まハ皆苦の割を奉りてまさ持ちけれど光たりせてくれし人獻鄙の
つと云は佗求乃んやてて鄙陋にくみて寺ハ分だ人たでいふなど
ふ俳つひ物りぬなずりん又共ようれ旅弦又無寺お俳さく
あり又人々又用し一言芳猿ふ人のあたなど候ける人の俳を
まゝのもしふれハ申しまにうう人とらは新古今の無寺にふて
続力ら俳乃ふらと全てたる人をも又 数俳もしは人が明道 傍家にまれ言し西堂
賀てし又揮手頼すなまし卿をもれし西堂中唯檀郎が
爲らと總得せんてまま要ろしいろ艶せ又乃結りきい近
くさ又國揮揮師又祖酒揮師の揮の漁庵和尚も圖慈の
作者もして此まあり

詩作りてそも見人石と口呈せしかバ一休禅師肯りき此は(?)ん
界にありていなるそのはつらはなるぬ風つても斎もらんもよ
やうせたるごしひとくよ自己の気尺まてそへもめ
○撰集ほ入りよはつてしもうとくへの野出羽が萩集
に後ずよ一首入りしとたひしもうひ名れバ阿もたに
人も数首入りしひふふ阿ハ多まきすのそそと人もあや
くしこうふうし云んおに出る又尺周法師の波浪ま数少
と共すらさ十八首までは中集よ入られなと義なふんとて
阿ひたれば袁がりしやも二首くつらまつしくぞ忠度朝
臣も阿ふ阿ふ阿たつく流州が行之すて又源三位尺へ
まうでしよ今齋の出と出るてて入集とらせしれも世の為る事
これハ其志義よらたさぬの事しいふてじわる事又其のが

云ふはおしなべて八代集などを撰ばれし
時金葉三といふ八代の集のうちにもおもてに名目のなき
乃やまとうたにてことに其名撰者ありける日は新に出す
へるしか撰者は法性寺殿とも申すなりけるべし
ども此のひとつれば今までやむなしとたんもいひしかる此日は
のちにはまた大国のやまとうたの朧銀(コウロクシ)にていふべき物かたり日のもとの人
吾国(ムゲン)を吾といひまた月海と去る物かたり西土乃人吾国
しも吾宋といひて日本(ニホン)をまたわが天子に仰ぎ
仰ぎ時にあはれし撰者の八稽(ハケイ)し出されんは寛(ガニ)若しかる
べし文選雅集に撰の時に師の宮かたへ候ける中に一諸
あまたありけれてある猶乃言の葉をしらずとも聞やめらん
と出されしとの御事ならしと云ふよりかへし撰しおきれ

しも意有なりて郁の方の境のかうて念せぬしいなかり
みそじなのうれひなく今勅もなかた撰集乃事をいひ
あて凡下の若が紀帝をもて入集のさたのなりかせんなし
云ふに延したるうちいてそといふ新撰集入とてるいひし
人との又云ひて撰したる人の志をとりつむ心を花に曉
常はむかしの恋をも又のれしがらとのつるか豈人をとかく
しられはらそをとまで述まいせんや
○此人国学乃作者(サイサイ)と云ひて今は中ともうなけり
いかにの又たくみなりといふもの又は好むしうききにて心る
こもおりて又在原でおのいはれんぬかりし紀貫之とまで
つぐらもありたるは中古の風として一ひとつびらかなし云
とおくしむ人もまたたびしてきこゆ集乃こと

世に行はるゝ此流をもちひつることなんたえし
其後かはりて後撰集はかはりやすくなりてさらにそへていへ
らく世にしれて今世の文華盛なるかしこし古今の作意をもまき
けるがふることを撰しいづれともいふべきはとなたの作のわざはひ
べきふりかはらねど今にいたるまでも撰ぜんとせしやいかにするに
三躰はたけもたかくはるべきとも其後は軽弱(ヨワキ)に落たし是は
世に千載集たゞのまことのうつくしくあはじきとすれなび
むまのたまのふる歌の奇は底(ソコ)よ力を今もうたてと損(オダ)しくは
まのみて新古今集のゝことに風情詞(コト)巧にふかく損(ソン)じたる
たゝんことにおとらぬもとをかゝれ出しければ恨なきもの
まのゝ人は其力に及ばずうつくしき歌とすとるほどからと
きふ落たるはおしくたへ又はいかなる人のうらみのなれも

其後はんなれらし落たしこれは三代集と基ふてとる世の新
勅撰和歌集のたぐひともなりてまのをもちひての奇はいよいよ
のんとはしして新奇となりしはちりて今うの文
まを一トたきはばらすも幽玄(ユウゲン)なりしかりけるにはいにしへ風俗
くはしくちまずれいむかくしらなれぬ一すしくらきものにたとへは
さもあらん花やかなるも風流にも其和する歌下千載は
あびることはやしくておたけのやまんとまは新古今集なと
まいるつゝいろは集はは拾遺集よりこのかた古今の新古へ詞(カゴト)
の様ふたとりもあて新古今後一觀(カン)向上になれしすのうて
三代集は拾遺の風を繼(ツ)ぐる人は其は唐風と謂(イヒ)まじ
そのかみの躰より盛(サカ)りし人も是とまねていふ其唐風をも
服するなるらし唐絹(ケンキロウ)様ともなるべし其風といふもの

中比よりの歌服は信実衣笠内府鎌倉右府なとこれと
ましく為家卿をとなへ為家卿をも子唱へ寄て世間の人とおなじ
ろうじに伝れども花洛の外寺祥僻館と続き唯並とらく
て古調なれどしかするかれなんとやと比べいへ是も同じやうに
る人乃今の歌をもつはらきらひ比べ今ゆゑとなりかすし
さとふ国しちうでふれ彼義の一具は体とまかせたなべくしい
さもぬ侍どもとはあてなるも挙げてもさとつべからむと
なる申とかげえたるうきのしかるのまゝ相へ古ふて云へべきやう
あるもの皆にて中古体とまれ是古今集とむねとしてかれ
このぬしをちるりもまかせてよ序寺のごとき優美なると
乃こ眼ふてゆのこくちら味なるへ誘しそこちられ彼やれ
らうしらふ究みまゐるべしなかとれ万葉風へすこしかりて

中古体はもとより古体もあるべし新古今集ふはよき歌あまた
の縄墨をまぶふはちるすくらんとかるゝには彼今からふむつまじきもの
とみくこてのくてこれを他の類もなくいゝふまのゝ文曲ありと探
て述きこふるとやいえん又さつくらへいうふる病そらむきさ
其作者んの味とうるうき得すてはかくんいへるは皆の凡人
ふ宵ちはいえんをまさにも指る人いさだかれ
にてゆくのふしたちいかたちのひとつも作の風
ゆうの人情るを言うる山ふしもよ風さえてやさしかれ
やさたん本情乃らむ此ぬるに寄物しい寄ににちてあちり
此ふのかごとたオはあさまて継れつるをゆいせんかさなし道
得いかるべきのこ

○鶴林玉露に雖貪者賦廉詩仕者賦隠逸詩亦豈能逃

○識者之眼哉楊誠齋云古人之詩天也後世之詩人焉
而已矣此論得之といへり西行といふ人の哥に山ほとゝきすそんハ
かやうなりやうなれどもおもはれけるものゝかたにいつもまた自己とき
了識見ハ実人のあはれへからずかハ祝しきもの也
○佛法と儒とはあるへき事にて儒道ハ生の説乃説と部し
せる例ハなんぞ乃菩提二家乃儒流ハ奇人をなしめるといふなる中
昔ハ儒者といふ人たゞ文字のつらふのみを用て道理とさるしハ
佛法をうるがせにしたるをみるにやかんそじ部わんとね
と儒教乃つとにまる奇もありて後ハ紀浮せる教
鄭がへ文本おもみる由ておものをしてそつ中おつぎさんて
と謂ひとさいまさん乎天ハその外にさうて界に閑積善
慶積不善必殃おるわれしんと人てよろこの教絶

なそへ神も佛もし付とせらんもハ文章の教後てもそれぞ
ハ外法もあるべきらしたまうんのんなれ後格(カクツメ)たしとも祝し
さわぎてそしれともあるハ不義乃徒なともいふた諫(イサメ)
ぬずして九条内大臣ハたゞのとなりよハ新しく保ちのとなる
おつけどハ新人やなにた富貴保がたく泰(タイ)ある否(ヒ)と念(フク)む人
なまおれ付めくハ継ぐべき佛事にし新撰集にある関白
高乃為民のたあるしと申ハ常も何の集めん此集にハ
れけまくらもの由所にあるまゝるハあるべし
○徒園の言ハ集る儒者孝宣といふ人のつと相ある為義
朝臣へつかふまでせられバ言くハきてもてとして人へてふいそ
せあわりのなかる外とハ由るハあかりてそのぶのみたけて教
るのれなれこゝろぬしておもしろきともやみて其本懐なるまゝ

○備中田中の井戸は光ある田葱(タナギ)はおのつからおこなふこたつ
このかいつる田にある葱(ナギ)は苗と云(カイ)にや悪きものなれば摘採
よく女のそくと邋遢(ヘンレイ)(バケコシ)し般ふするたしん可曲なちや
すもの其一しやれ木枝のつくれし家人(ケニ)言簡(カン)にて義房し
邋風(ヒンフウ)の農事とはしむるえものも懈(カイ)ぞべし来(ル)へ丸ものい物曲
と掃除(サウヂヨ)もるみもおるさんりしたいぶにつく此光あるいを
付まつるいの功ある人もおつしや小澤老人云郷しいひかへつるや
つぞし光い光あるくあかなく此曲をとあし擬うするゆ安積の田中
の井戸は葱(ナギ)乃生するに光りかやけ給き〵ちつくはりし手にとりても悦
よくしとぞしそらは秋彩ぎの沢をとく又光あるい葱乃花といふ
又生するもはやし咲けべいとうしてかへるも同名と郷とも花なりま〳〵
ちうしく云々

○米人援けしは慶元の功ありし緒侯封地三千餘万石
ふみよりむかしより女も小袖にての手わりてやくをは
しらは侍女閨門(チイモン)のちよと語るまよ書て文君へ佛(タ)へ詞ちつをは
閑せんしん侯部(アヘ)に縁(ユル)を以て侍女もいは士がまいらぬ人ぬ一やと
難けく閨をもって其手(テキ)に徳へうれば侯にきさまも士宋がいぬ事
とありしも一箇(ヒトツ)あれば事なきよしと言ゆる人にてもいれぬる
付しまでなけりしにてに之とかせにも又さにのそに此事に従れ
まだたうしの絶(タヒ)えとあてややくし怠(イカリ)とをやうぐうしく文書
付し国乃とあるまで別つる人と体にへ徒まをいふうちにたるんで
肩衣(カクギヌ)ふつろびたるぞし緒国への帰るなれば国別の士集が為と
情でもあるべしとこそ干なよ自筆にもちを結めて給へまとし
みやりおもてなさん兄家士への云旅毛恐怖をさぐ又六十七八

すまゐの様なりしも今は世にはやれる紙の帳截(キリタチ)するを集めて用ゐるはかりし越しし入国の仕出しも此同じとかや
ぬりたるは昔反古(ホウグ)を集めて張りしが後には好みてなしけるも
あやしと謂ひしを此もろこしの様とまなべば我国の隠居
は今の唐人になぞらへしとそ倹(ケン)の意にもあれば暗(アン)に謗(ソシリ)もなく
しもなけれども此後の風俗奢靡なる人はかへしとみえし
官家は大ニ衰微(スイビ)乃時なれば理(コトワリ)されども或人崎のつとめ
て白小袖を同僚(レウ)乃人へ借りにやりけるに即一重(ヒトカサネ)使へ
来りしが一の箱に入れたる内に掛衣(カケエリ)二入て返
し侍りし事并の老人新任しも何某殿乃許の余りにまて及び
たる事を常に赤豆飯のみふるまひしなると疑ひて知られる事
なりとか此ごとくたとひおなじ中に其余り凡賓富とよばんを

貧窶なる陋風(レフウ)といふべし
○近世唐人乃墓の大なるを見て是を富にくらべ天下の事を
知る頌と倹(ケン)せざるは孟子も説給へども是卑しくて是れ
は大がは侍るべし墓碣之人に京たちたるは唐六典文公家礼
にも出たれども今は新たに清く足るべし何も元来の
人は墓乃今おほきさに限りあり是を律とし猶古人の揺
れ三尺くばかりと定れどまた伝へ忘れてしみだりにすべ
からも人を上着(クハサ)にのみぬ世の常なれども今なほ古への法
を守ることなるべし
○孫氏あり此王家統(ワウカトウ)天子の仲孫と由らんどありといへる
くだりあれば家は傍らにけて用ゐたれど是く
あふける人おほく今も見

○古今集之原西家の秘本と中院也足の一本とをたがへ
よく見あはせて細川玄旨法印天正十六年此奥書あるなど
又写せしとぞ。かの序の内をあらためてとらへ本を読むと見
そこにありき。此御詠かざられし館林たちまちてこの書を得るたしかと
そがれしはたゞうり河内集の卑見(タクケン)編さるべしと矢部真苗(スナホ)なる人語り
きこえし。此人の若き時後拾遺集の序にかへとてあらたむべきところ
まじく今古今集のかたはしと撰せられしをまたなかりけるの二字脱
せるにや。しかれどもみな古き本にしたがひたらんか。
○安藤為章の年よりは山井(?)聞きとりしかどもの為(?)に北若主
鮮彰若(?)殿の序なき今冊にて四冊と記せる後(?)源(?)士明河
供乃(?)法師にやりし人今の為(?)に乃年来と集めたる古今の年中
にみえたりしが、中新葉集本の年と案(?)ふ故為章のことわりしは

新のかなし舟ありて云りぬ。旧本にかへてありしかどしく人いかにしきりん
なほ[illegible]わかちぬ。遂にしとしありて此歌人も歌書を得
たりしがしもとしかあらて新のこしたなりしかりしかとりえかや
いはゆる才の人たれば女とあるなれば女乃ごとくせうらうて中比
宣耀(センヨウ)殿としたりしが女帝の寵にあづかり妹は男なく立て権
中納言ありけしが両親にいとはれ後にはこの人となれども家
栄えと没して宣耀殿にて中納言にかはりて奉るべくすゝし
よしけむ為兄は源氏物語より後に絶えるものともあるらし
為章の説に其の物語ども草子に作りしと唐山代に説に
あるべしとぞきこえし
○右の物語乃中に女房として孫にあげる時の習は眉なき鉄(カ)
漿(ネ)つけずして女びんせらるれども為章はとかされたり

よりてみれば此両説ともに世は中頃よりの人々でも尊き事の様衆
得ることはあらざりし也。今井似閑の翁の訓林に西岸先達の
説に謂(イフ)所に後鳥羽天皇ニ見ニ日本傳ニとあるも打まん
朝廷の一変なりけるべし

○ある家の老人雅経に今世の肩衣(カタキヌ)袴は近衛龍山公
薩摩にて御遊ありし時に其ころ松永弾正製せられしといふ
へつれるといふ説　銭闘(セントウ)の袖のもたるを不便にして袍
の袖をきりて裏せられし。玉露に宋後代の士大夫衣裳ニ
窄衫(サクサンヨ)上下如ニ之(シ)ノ又云紫窄衫乃戎服也出於兵興一下特
權宜ニ而相承テ至今ニ不能改とあり。袖の窄(スボ)まりし袖の作りと
兵興一時の權宜に出るものにして今用ゆるは永世のことにあらざれ
ば同轍(テツ)也

○伊勢の斎宮の画に烏帽子と冠りなどしたる女かたあるは
かくいひしもの笑ふ人ありしが業平朝臣は儀同三司 伊周公也
三郎なりし子に烏帽子をかぶりて入りてかく見えて着用す
修験者が今に遊の頭巾かぶりしを進(スヽミキ)女乃外に見えしを
見るや後世まで殊にやや其人の手にまでの頭巾しかぶりしは
衆(コウシフ)の習にて是のみならず伊勢物語にも見えて殊にあれ
卑賤乃者にしても見えず卯月伊勢の斎院門の
所に於て今に見ゆる伊勢の橋の古図にも居士又ある
尊ばん乃せにかぶりしと見ゆる作りもありて田舎より
出ずて見えて人情にすくなからぬことも見ゆるなん
しかるに源大将の烏帽子にて鎌倉の手に伝ふるもありて
よびしに義経がつけたるは東北の説にかぶりしと

ことの顔りに上古ははかまをつけざりしより小説などに皆見え
ありけるに近くは打たるをもてさくら後三年の奥州
合戦の絵巻に武士冑(かぶと)を脱(ぬぎ)たる烏帽子と
見ゆるが冑の下にかぶれるはひげゐたるものと画けり今の
士(さむらひ)も昔はしもなひしける事を近く人もありき又むかし
延喜式には無かりしと縁(へり)ありといひたるは誤にて縫(へり)を漆(ぬり)
ぬりにせるさやと解したるにはあらず日本紀天武天皇乃巻十一
年丁卯男女始結髪(かみあげ)仍(よつ)着(きて)漆紗(しつしや)冠(くわん)と見え又同時廷の
神皇正統記の天武帝の條に朝廷乃法度多く定められ
みかりに不漆紗の冠をきるまで後世例なりとあれ
ども日本紀此に擬(ぎ)なくまくる事にもあらずして此漆紗といへる
は行あとしは胡服の冠に傚ひしにや深くもつまびらか(キン)なり

しこれは元より胡服の冠なれども唐の巾子に髻(もとどり)と
共に巻て結ひてゆへるを後(うしろ)へ垂たるが纓(えい)となりしは後世なるべし
なれども帝業のたすけに起りし後十二冠階の時の次第を大
織小織大縫小縫と云しは織物(おりもの)の色をもてさだめられたり
○夜竊にいれの標示(しやうじ)なる冥加をも見ふけり一とせ或人
関東にて在るしけるは大小人と在るに勤る官服にて
提灯(てうちん)と云しをいれ在ひらべ迎へる者なく所も桟敷(さうよう)の前に
障(さは)りけるしかるに其頃にて役儀なる人の急に大なりて野(とこ)にけ
行てありしが諸藩より出入の町人を役人ぬと許されて来りし
かくてかくまでに在るが用心すなるにてこうかく関をも工にも離(ミシハ)して
一つの役の狭(せば)きに押合ひ立ゆしたりけれども又一人役儀あり
あけてみてしかりとなむ男来にて旅立たるが山路にて御(ジン)免ない

さり衣れと脱ばいふなるのみせんとらつはおそれてたゞちに膠
みゆるり膠になりされば手に綻くなりて綾織をとりかへすべき
のみならず何の甚もなく谷へ投入れ錦は衣れとふりかざしてかへ
ともしいはまくどかふぬ夜は平生ねむりとも其のかたなどとる
町より衣裳にとりされどもすなはちかへるべし何ゆゑに拵ゆし
世ざしおかしいふ所にまかせ手筋の袖といふも猶更のかはりにたつ
まで形をともなりのびなれ其れは同じ
○謎絵といふもののやはらかきろこともよりいひも後世に好評と
謎字によせるとしらずに栢原代尾全紀せるもの也ゆりとそれは
きいあぐ
〽あきりとおはひる文づるの古女房の住ゆかがやうるが雨夜の
ほれしたるふたかどもそらけて無に拵榛葉落て見まちる

やうけて雪といふ榛葉落てしいはの言と隙く之家やと
なるといはばどきればとゆふるむつるとらてゆきといなりぬ
これよつきてらの筆なれちらいはまで筆れ中よちらきら
まゐやうきつの児中くばれいりぐまんとうやいづこの
はだがときにもそりの人無て夜もまけるなりけり
負へいざいかめうせられいやしら人有るかんようらびて
うりぐかんろにろのきろいそらい言のくさやうきつの
とうけくだれいりといふや也しもの三文字との也
さ中の七文字をのくるとけくぞまといふといひまだら
りきるたなりぐまんどうれ願ひておれるぞらの二
文字をとらし嫁なる雁にちるたなびくとはけ
まりらも深くいふ事めて無やしむかしの風流ちる

ぞかしいかり出られおもてにけちられいかりの三すぢには
れいまだつかりたるしにふてねんつふしもおもふかふとまれ
うしあらしと判ぜられ申すし也 此しるし後京極摂政の御記
あさかほやまかなりけり水のうへふた人ふしと解りなど思ひつゝ うごきなき 花のいろは花の本 もとその葉は下その木のもと思ふとふかれたり
○和尚はわすに指楽和尚は古木都 欲利肖孔子者くとある
愛するに利欲大細をもふかりしいふものなし 儒のいましむるとにて
まれに子ていふことは世継よろこぶ事なき人は毎くにも自にはけれ
ふるものなれはふるは言のすしき系のおもふすにかはるもの 行
也に文は泉とあるを子すきことを人の前孔者之の語は今世の宗系
是なれどもかみ得たりし孔子は泉と毎できれかせしかや
○除霊は無想人となるもの要とかはして元ならは見と也
らきそれ運とうしなぞくしと元禄の法はかぬはまでおもし也

なすつりとかけさぶそのいは艶ちの事なると彼うりくるとは女うえ
ちぎりのさるにつけるなるにけむかりも出来しけるそふでし未嫁女の縁乃
うけおそどんもひとしも心ありゃそのうえとなんざれはもとさしてけるとしとこ次
一老人には板に彫て愛あるにするうえたに心事のまおしきさりしとやれ
出ずきしましとすてまに也とうしたるひ心は日子ともなく事しなりし世乃
甚諸盛なる人々は猶前代ともよせもつりくといつり
○厠と雪隠と常にいひならはしたりそれは妄想
圓悟の法嗣義堂和尚の著されし空華集に雪竇和尚 清役
すり雲隠寺の浄頭 厠とする 役僧の名 をしけるなりしに出すとはゆ
祖芳和尚の詩に東司 厠の内に雪隠の二字と額してするは建仁
ちふねると聞きし詩とをする古様法常すに行まつらへ屋舎
茶財の今も禅流に似たるしりし也 雲開の我乃どもたるぞるる

ことなりければ雪隠ともいへり　四人箸のたぐひも[illegible]是も使(?)ひすてたるものなれば[illegible]

○今世遠流(?)とせる付[illegible]人に三付乃會[illegible]の前に労(?)と號(?)

せるたぐひは酒餅のあたへとらするとはけんどんといふへも字にかなはし

なれど[illegible]用ゐるものをしるしたる[illegible]

天正十九年六月

檮迭(?)依入用注文と記せる数条の内

三十文　粽　硯水一日分

同ヲカリノ内

十六文　酒　硯水

硯水とあるは細へ未聞なし　硯の乾(カハ)きたるにとふとてそへ手が

よく渡(ワタ)したるもの[illegible]酒菓とも与(アタ)へしよし[illegible]

なれども是は後世の説也　攝州ハ間食(ケンズイ)のといへり

○餅をかちんといふことは[illegible]の二名にて、

むかし母に[illegible]験(シルシ)ありしよろこびに餅を[illegible]

よりはじまりて則歌賃の字義充(アツ)るは後の[illegible]や胡[illegible]

褒徽(スイヒ)の[illegible]するもの日毎に餅を献じ　是は例のごとく日毎に小豆のもちを

献ずるに、それが褐色(カチイロ)の服をきて通ひしより女房達はかちんは

いふなどいひならはせしより後に餅の異名になれりともいふ　皆

信じがたし　ただ褐飯(カチイヒ)なるべし　いづれも理(コトワリ)に合ふ　搗(カチ)

栗(クリ)といふも栗を搗(ツキ)たるなり

○婦人女の詞に米をしらげたるをいふ六数米よりいへることうつほ物

語[illegible]

[illegible]

よしつゞしもあまし稚なきさいはるかく趣ぞし是ハ大阪にて人市女といへるよしを吝嗇(リンショク)なるよし
たるが故に怪へといへる由見えてゆゝしき
せのさるなとあり

○俗間に甲の字を誤りて冑(カブト)とよめり。礼記曲禮に献(ル)甲(ヲ)者執(ル)冑(ヲ)。鄭注、効(ス)其大者(ヲ)。擧(ク)其小者(ヲ)便(ベン)也。甲(ハ)鎧(ヨロヒ)也。冑(ハ)兜(ト)鍪(ボウ)也としるを見て甲冑の差別を知るべし。或人云、史記に被(リ)甲冑(ヲ)とあるより誤れり。是ハ甲(ヨロヒ)を着る者の冑をいふとこそしらまほしけれ

○血をすゝるといふ事ハ、みな背洞のさまをいふと指していふものに、よまるゝハ下(ヘンシハ)が脉(ミャク)を傷(テ)以血(ヲ)生するにもかなるなれ。礼記檀弓篇に高子皐(カウ)執(ル)親之喪(ヲ)泣(ク)血(ヲ)三年。鄭注に言(イフコヽロハ)泣(ク)無(シ)声如(シ)血出(ル)とあるを見て、是ハ人のかはるべきにやといへり。鄭箋(ケンキン)はなべて遼東(レウトウ)豕(ノイノコ)の類也

○時俗歌(セキ)のことをも自負といふハ、皆あやまり也。曲禮にも因

車上不廣欬(クカイセ)。鄭注、為(ニ)若(キ)自矜(ホコル)。廣(ハ)猶弘(ノ)也とあるを又栄花
物語にしるせる有国卿の宰相殿のことに無禮のことと指揮(シキ)
ならぬにおちだけしとて物せさせたりけるよしを東門院の入内の
時の儀式にもかだけしのみならず有国ぞいたく欬(カイ)せられける
まことありしもいとさまでもなくさきだちてもなし

○此人の○今の世人いはゆる祇園林にて庵をと結びしをと號しに
て義太夫といふ。義の字の下に唐山にて蔡陽
と號せしを義太夫といへるを、いはゆる義の字にも太夫といへるは
義の字の號のみならずとて此方に宮にも義字とぞいひける事あり
随筆といへる人の以義為(ト)名の利(リ)最(モ)多し。陳氏の中に與衆共
之(ヲ)曰(フ)義。義倉、義社、義田、義学、義役、義井之類是也とあり
然れバ號とかゝりて人のよぶまゝの名をてまかなへるなりけんかし

○はやしにいふん乃宮前随筆に衆評尊戴曰義ヲ義帝とし也
とありこれ義帝ハ項羽是をたてしもの故を惜ものにて偽尊
なりなれバ於義の義ハ乃こゝにいふ人の此随筆にも
自外入而非正者のよしと義帝を偽尊とあれバ此ハ入べし
たゞし此もの日本に解するならバ衣ハ衆尊戴乃をミて裏
面ハ非正のことやらん
○義歯ハ俗に入歯といふ義立有りて工人是を作る
と托せしは工人の入歯をつくるものとこれと称し
久しく此れいふの歯よかへるやうに作りて入る義歯
のごとし骨肉の者にあらねバ其もまこと物ならねばいけ
まどはせし言すれバ実ならぬなれどもこの言にいひし
手代此女人婿をと養ひし女に婿取る時は工人の言とぞ

○とも此れか乃えらかしまうもい相紛せしめよりて義歯よしとて
善言と得られし此義字によりて此儀あり　女人も
工人も得ず質なるべし
○歌人語に辻という字此方にて作るハ非なりといふに
此に辻といふ義ハ十字街の事にて十じといふ字は一
字に然したるを四辻殿四条も辻と書る又辻とも
いふ也よし
○本朝にて作る字を大宋書る辻字乃もの峠島畑榊
などいふ字の類も此方にて作れるとおぼしけるを
東人の文字にも字典に引五音類聚に信弄字と此方にては
いふなりと注せし義ハ天なれも此の俗字とみえ唐則天の時
作れる字ずこしも和ふ人の字の清朝にても作る俗字を識

は橋杭の事乃由緒番匠よの下紙にんも踏は舟の着岸の
ちかうぞ又礎といふ字は此ふ不攪仍以櫂礎と書人の又
かなり水中の大石まて私と損じる故少きうてこと称しみて居
ちえていふ事のなる事しと拙人撰田房民説之私按するに列子に
ある沃焦石乃故事よりいでて二字を一字にせるかやあるらん
○千石者彼も今云銘せる付漢人の禄石数戸数の法に於ける
明かなと記にせる人もあるが此の前漢書などにあるにとくに
此なれども其にいかさもて成されたるものか漢の功人
をかれがたる所を牽す前漢百官公卿表題下師古注曰漢
制三公号称萬石其俸月各三百五十斛穀其称中
二千石者月各百八十斛二千石者百二十斛比二
千石者百斛千石者九十斛比千石者八十斛以上斛数

同功臣表平陽懿侯曹参侯戸数下注右丞相侯
萬六百戸同六世元鼎三年侯宗嗣中器戸二萬三千
鼇頭許恵元曰参始封萬六百戸至其六世乃有二
萬三千叙所謂叙ト者功臣表之叙也四五世間流民帰戸口亦息
者也以上戸数私よりて封建の世列国千乗の家まも及ぶると
郡縣乃世となりても三公といへども周年の無計然に四
千二百斛封侯の戸数はもしにあいせては大也といへどもまる
封建の世乃ぶるふくしぶまハ禄は数なるし民家方も中常まで
職田位田の定合よりえてる所位田は一品八十町二
品六十町三品又十町四品三十町正一位八十町
従一位七十町正二位六十町従二位五十四町正
三位四十町従三位三十四町正四位二十四町従

四位二十町正五位十二町従五位八町女ハ減ニ三分之一ヲ職分田ハ太政大臣四十町左右大臣三十町大納言二十町かくはじまりけれバ令外の官も准へつゝし兼官ありてもいまだ足らじ依て荘園ハ官位に抱ハらず代々相続し天暦の比よりは後藤原氏の威権盛なりし時は国々にあまねく持されたりけれども大かたとなりしかバ令新建の世の大小庄々数かぎらずして

○武人の土着の豪族も富家の諸庄に及バざるはなかりきと神々の厳令諸仏寺の造立広大なるまゝ朝ハいふにおよバず莫大の費ハさらに功人民を駆役の務のみならず費用多く材木金銀乃数の多きは止ることなく思ひしらるれバ仏寺の建立此功徳と名付しにもあらざれども是地獄の業

と永観律師ハ歎息し給ひけんかし

○又当今神社に位階とまうすことハ又まことに畏多き神を正五位正四位などゝいへるぞ其又いハれ正五位なれバ十二町正四位なれバ二十四町の田を奉らるゝ掟なるべし今の官人ハしばらく甚くらべみて稲荷も正一位と社家より免許せるとぞいふめれ

○昔年常陸国南郡の社よ三百余石の朋をもて手つけにかんぞうしられたるをかまへしたまひしに富されハいろくの物と取交へて給ひしかバ感せられ随んぞうの名義詳ならんとにまのれも近頃まではねぐぞうとして人のいふ説少々借りつゝれども不足ハとりしげふとて帰らる出ひおくもし金銀の多く給の中にあるとふくさかくそ

さりやしいりふいふ三百年ふあれど文華なきゆゑやうに
文字をおつりてべきよりて沢しよふし情を譲りてものふ抑りて
世推せしがたのこともなく合新の字なるなるべしとせん帰く
作日義よ以名れば微然とし甚延ありし横本ふて自
○楽庵老人同年家ある人の京席は十六ぐとぢると討とい
ろごしたでの字の何年云みてに待く日趣しかばふるとてで
いふとむ何年歴持じて善より孫され綯孫せねの濁音でく
楽居大ふうけがひる
○或人云年ある人の内ふ本三位重衡と云本の字ん所じ
一統よ文字三位たる付文とも三位としひるを新三位とい
といへるも本三位の說と不知りんに重衡々子なり先は平字
とおにおやまるなるんかといへり

○或云小彼斯匿王経を引てあせる所守口摂意身莫
犯如是行者得度世周利槃特以此偈得阿羅漢果
匿王怪而問佛 佛偈告曰学必不多行之為上 云云
○まうそれ身に意を性むにかく似しくなしば傍しとふ
よくあるしとれ人学とねとども実なくしげるといへんあるものゝ言ふ於
のれらがおどよおもいは耳学問と其の学ぶ人は眼学文多しといへるは
理まみがたくき鳥窠禅師楽天に対して諸悪莫作衆善奉
行と示されしとこは三歳の児童も知りしと言しにあるあどとは
三歳れ児ても云ふ行ふしは百歳れ翁もかてしと説まつるも是之
槃特は愚魯なるがためふ一偈をて得道し世人は黠智に
よりて多岐にて迷惑せり実ふ小智は大道の敵なるれ
○或ひそうふ四方三安の養生とせり四方は方ニ飲食

安於所言説於思慮也三安は安分安心安死生也
されも四の守りがたし況や三安は賢者も為し難し何ぞかく
やすんぜんや只老を嘗るに希ふのありなしのまゝ自然の養生
となるべしは餓鬼の所謂食ふものゝかも

○此は百如禅師の法語を示されしを初めに人の褒るは諂ふ
にあるべければ吾がこゝろ偏をよくいふ謗るは却てこそいはゞ
とも云とられどよく物を言ふは羅辱如驚吾儕の為に
は適當の薬石なり

○観山水亦如讀書随其見趣之高下といへる古人の
語を初阿法師といふものに付けられしをも老て再び見ん
是れは又閑しものにかゝらでまつはるものゝみならず
まゝありぬれば雲月露もて数條を記す通し

たるが又相承老ぬれば眼はかすりにはさがるやく自ら
頭を見る目のかりはありし云々をたえて人の喜びもせぬ事
にかこうりとんとくじ吾ならし今からぬるしいろふ知る人数
しかと独へても云はぬ物事賢きおもちして後物は
も経路めかしくものぶちん吾儕の僻と此よしなしごと
ども年々にまろぶるにはきても此僻やゆうじらんとおそるゝ
なくなし

閑田耕筆巻之四終

あらぞの森はねのか法しきうつに筆ださるひとし
まことあつらされいある人ちづそし隙てうちかたみ
肉をおほせられてあるいろふかくにあげつゝひもたかれどさり
まづつ新なたいもやよわおゆれなたなそこる看なるそれば
えらくもれわくもれ一かさにかの筋ともはしてそれ
ものあらひいたりぐるまてしやゆりちらすつくれとの
たてうるむものなつやもえんゆるかおのだがうふさそたるむね
きやわらんかでい常にさとうん様よと祇つるまのうとわいま
大方た御うへでもと一刀用とさされ牙るよ角よや
ちさくさも福ほそかどみするたらしまでいぞそほよ

ようしやしかぞふに生れぬ彼言り　いましがらくも
まきらしちゞれし文字のくづれ言れ侍るにとよしかう
ぐさともいはしてやみぬけりたゞより文乃端に記り
また文ぬ言に侍てんといふ人もありけれどちるさらしめた
その外わくれよとしうけねばおもうふにすぐしき
うちはいさらげ　はたけあつめむとさらしてかすがの
第やはみさむ

寛政十まり　つとせ乃春

蒿伴　資規誌

享和元年辛酉春三月刊行

平安書肆

林伊兵衛
木村吉右衛門
齋藤莊兵衛
鷦鷯摠四郎